様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３５１３

研究課題名（和文）風土記と古墳からみた常陸7世紀史の研究

研究課題名（英文）A Study of Seventh Century History of Hitachi as Seen from Fudoki and Mounded Tombs

研究代表者
佐々木　憲一（Sasaki, Ken'ichi）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：２０３１８６６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,850,000円

研究成果の概要（和文）：　7世紀といえば、中央（奈良盆地）では飛鳥寺が596年に完成し、権力のシンボルとしての前方後円墳の意義はすでに失われている時期である。また政治的には律令国家に向けて組織が進化しつつある時期でもある。その時期に常陸南部では70m級前方後円墳の築造が続いていることが判明した。70m級といえば、東国では大型の部類である。それも、1基は二重周濠を伴い、もう1基は周濠は一重ながら、下野に特有の基壇を伴うという、強烈な個性を発揮していることがわかった。
　これは、社会がすでに国家のレヴェルまで成熟していると思われる時期に、まだまだ地方豪族が自律的に行動する余地があった可能性を示唆する点で重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　今回の研究の大きな学術的意義は、中央集権的な国家が成熟しつつある7世紀に、常陸南部の豪族がまだ自律的に行動する余地があったことを明らかにしたことである。「中央」といえば世界史において、強い権力を有していたというのが半ば「常識」である。確かに、地方ではあり得ない、整備された飛鳥諸宮の存在は7世紀の中央を象徴するものであろう。ところが東国では、前代の習俗を後生大事に維持できたのである。中央の影響力が及んでいなかったのであろうか？平安時代初期の対蝦夷政策では、常陸は役割を果たしているので、常陸の豪族が中央に無視されたとは考えにくく、やはり、常陸の豪族がまだ主体的に行動する余地があったと考えたい。

研究成果の概要（英文）：　It is commonly accepted that Japanese society evolved to the level of a centralized state by the seventh century. In terms of material culture, the earliest Buddhist temple was erected in 596 in the Nara basin where the central polity was located. The erection of Buddhist temple became the symbol of authority, replacing keyhol-shaped mounded tombs. In the southern Hitachi region of eastern Japan, however, our study has made it clear that the construction of keyhole-shaped mounded tombs continued in the early seventh century. Moreover, two early-7th century keyhole-shaped mounded tombs, excavated during this research project, were very distinctive from each other, although they are located in close neighborhood. One was enclosed by two moats, and the other was enclosed by a platform and a single moat. This strongly suggests that local elites remained somewhat autonomous. If this is indeed the case, the central polity in the seventh century in Japan was not fully centralized.

研究分野：考古学

キーワード：古墳～飛鳥時代　中央周縁関係　国家形成　古墳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本研究は、古墳と『風土記』に拠りながら常陸の 7 世紀史を再構築することを主たる目的とした。7 世紀と言えば古墳時代から奈良時代への移行期・変革期であるが、7 世紀初頭でも二重周濠を有する本格的な前方後円墳が常陸国府、国分寺が設置された現在の茨城県石岡市に隣接する地域で築造されたという、古代では特異な地域である。また常陸国は東日本唯一の風土記残存国であり、文献と考古学的証拠との照合を通して、より具体的な地域社会像の再構築ができるはずであった。

先行研究がなかったわけではないが、石岡市など常陸南部に限ると課題は山積みであった。具体的には研究が常陸北部の特に古墳時代前・中期に偏っていたこと、『常陸国風土記』を重視するあまり研究が演繹的にならざるを得ず、発掘データの不足も相まって、考古学的検証が十二分ではないこと、などであった。また 7 世紀史再構築に関しては、広瀬和雄（編）2013『新しい古代国家像のための基礎的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第 179 集）は、全国的視野から文献史学者と考古学者が結集し、後期・終末期古墳はもちろんのこと、集落遺跡、寺院址の調査成果も取り入れ、説得力のある成果を生み出しており、本研究の模範とした。しかしながら、440 基以上と全国第 2 位の前方後円墳の数を誇る常陸のケーススタディが完全に欠落していた。

こういった課題を克服するため、研究代表者は 2001 年以来、常陸の中期～終末期古墳研究に献身してきた。具体的には、国府・国分寺が所在した石岡市の東に隣接する小美玉市（当時、玉里村）所在の大型前方後円墳、帆立貝形古墳、円墳の体系的測量調査（科研、01～04 年度）、石岡市丸山 4 号墳（大型研究、06 年度）、行方市（小美玉市の東隣）大日塚古墳（学内研究費、07 年度、14, 15 年度には発掘調査）、かすみがうら市（石岡市の南東隣）坂稲荷山古墳（大型研究、08, 11 年度）、同　折越十日塚古墳（科研、10 年度）、東国第 2 位の規模の石岡市舟塚山古墳（科研、11, 12 年度）、石岡市佐自塚古墳（実習、12 年度）、小美玉市（旧小川町域）地藏塚古墳（実習、14 年度）、以上の測量調査を行い、常陸国府の周辺地域における古墳時代中期～終末期の在地首長同士の関係とその時間的変化がやっと理解できるようになってきた。

２．研究の目的

繰り返すと、本研究は古墳と『風土記』に拠りながら常陸の 7 世紀史を再構築することを主たる目的とした。古墳文化の東縁地域である常陸に光を当てることで、律令国家成立期の統合がどのように、そしてどの程度進んだかを評価しようと試みた。さらに、この常陸の地域的特質を明らかにするために、畿内の終焉である播磨地域との比較を行った。上記の目的を達成するために、以下の 3 つの具体的な研究テーマを設定した。

1. 常陸国茨城郡における地域勢力の変動のモデル化（このプロジェクトが本研究の柱）：『常陸国風土記』は後に国府・国分寺がおかれた茨城評の立評に関して一切言及がないため、 かすみがうら市内の終末期大型前方後円墳を発掘調査し、またそれ以前の測量調査成果をまとめて体系化。
2. 上記発掘成果の常陸古墳時代史のなかでの位置づけ：常陸北部・中部も含めた他地域の古墳・古墳群を集成。
3. 常陸南部の古墳時代史のなかでの位置づけ：同様に風土記残存地域であり、文献史と考古学を統合した研究が進んでいる播磨地域との比較を実施。

３．研究の方法

上記 1～3 の課題を達成するための個別の研究方法は次の通りである（以下の 1～3 は上記に対応）。

1. 『常陸国風土記』は後に国府・国分寺がおかれた茨城評の立評に関して一切言及がないため、茨城評内のかすみがうら市内の7世紀初頭築造と思われる大型前方後円墳、折越十日塚古墳と坂稲荷山古墳の周濠部分を発掘調査した。一番多くの情報が得られるはずの埋葬施設については、発掘調査の許可が地権者より得られなかった。発掘調査は 2017 年、2018 年、2019 年の 2, 3 月に、地元かすみがうら市教育委員会（担当は千葉隆司）のご高配により、明治大学文学部考古学研究室、茨城大学人文社会科学部考古学研究室、東京学芸大学教育学部文化財科学講座の大学院生、学部生の協力を仰いで実施した。さらに、この 2 古墳を霞ヶ浦北西岸地域の古墳時代史に位置付けるため、石岡市舟塚山古墳・丸山 4 号墳・佐自塚古墳、行方市大日塚古墳（発掘調査も）、小美玉市地藏塚古墳の測量調査成果をまとめて、『霞ケ浦の前方後円墳』と題した 1 冊の報告書として刊行した。
2. これまでフィールドワークを実施してきた石岡市、かすみがうら市、小美玉市の古墳文化を常陸古墳時代史全体の中に位置付けるため、常陸大宮市、日立市、東海村、大洗町、桜川市、行方市、美浦村、稲敷市、潮来市、鹿嶋市の古墳・古墳群集成を作成した（茨城郡、筑波郡、現在の石岡市、小美玉市、かすみがうら市、土浦市の古墳・古墳群集成は『常陸の古墳群』[2010]として刊行済）。集成作業は萩野谷悟（常陸大宮市）、生田目和利（日立市）、林恵子（東海村）、蓼沼香未由（大洗町）、川又隆一郎（桜川市）、中村哲也（美浦村）、石橋美和子（鹿嶋市）ら地元の文化財担当者の協力を仰いだ。また茨城町と行方市の集成作業は、その自治体在住の茨城県教育委員会栗原悠、小澤重雄が、稲敷市、牛久市の集成は、『常陸の古墳群』で分担執筆をお願いした千葉隆司と曾根俊雄が担当、潮来市は佐々木が担当した。
3. 常陸の他に風土記が残る播磨、出雲、豊後、肥後のなかで比較対象として播磨を選んだのは、常陸が古墳文化の東縁に位置するのに対して、播磨は古墳文化の中心地たる畿内に隣接する地域であるからだ。7 世紀になっても前方後円墳を築き続ける常陸南部地域には中央の王権の意思がどの程度浸透していたか怪しいが、その点を畿内隣接地域と比較することで、「どの程度」を明らかにしたかった。具体的には、兵庫県神河町教育委員会（担当は竹国よしみ）のご高配のおかげで、京都府立大学文学部考古学研究室と明治大学文学部考古学研究室の大学院生・学生の協力を仰ぎ、同町所在の高畑通古墳群の測量調査、城山 1 号墳の横穴式石室の実測調査、隣接する市川町山王 1 号墳の測量調査を実施した。

４．研究成果

折越十日塚古墳は墳丘長 72.3m、後円部直径 41.0m、クビレ部幅 24.35m、前方部幅 43.5m でほぼ確定である（図 1）。二重周濠を伴っていることは 1 冊目の報告書『霞ケ浦の前方後円墳』で報告した通りである。今回、出土の土器をすべて分析したが、古墳に伴うものはなく、すべて奈良・平安時代のものであった。古墳の築造時期は、発掘調査の結果豪華な副葬品が発見された千葉県栄町龍角寺浅間山古墳の横穴式石室と、盗掘され開口しているこの古墳の玄室・前室との形態的共通性に基づいて、7 世紀初頭と考えられる。

坂稲荷山古墳は、2012 年の測量調査報告の結論に反して、周濠が二重ではなく一重であ

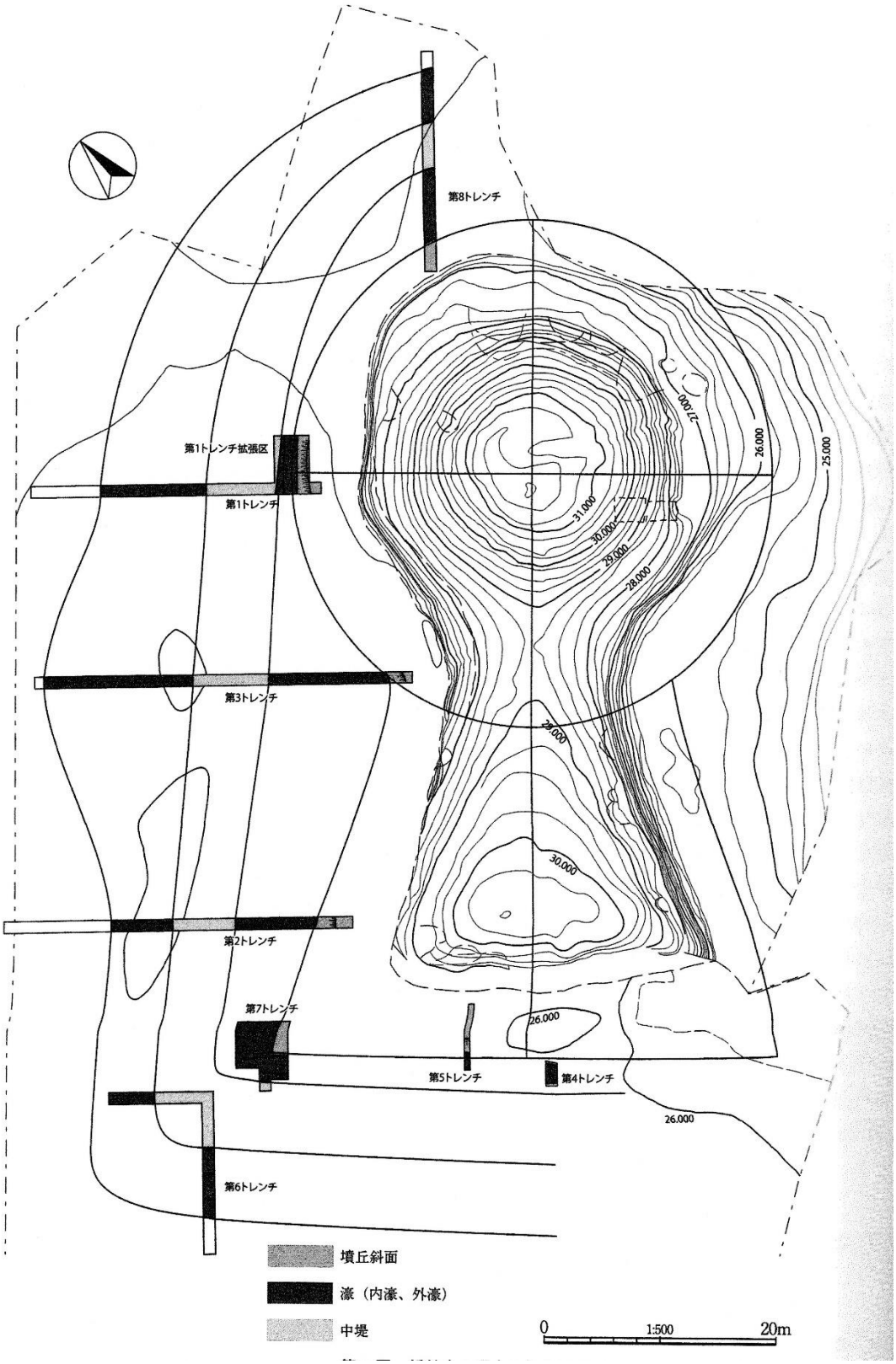

図 1　折越十日塚古墳のトレンチ配置と墳丘復元図

ることが確定した。また下野の後期古墳に特徴的な「基壇」を伴うことも判明した。発掘面積が限られており不確定な部分もあるが、基壇を含めた全長は 70.6m、後円部直径 40.7m、前方部幅 60.0m である。古墳の築造時期は、常陸で埴輪生産が終焉を迎えた 6 世紀末以降としか言えない。中央では飛鳥寺が 596 年に完成したが、それ以降相前後する時期に近接して様相が大きく異なる前方後円墳が 2 基築かれた意味は大きい。

これらかすみがうら市内の古墳時代終末期前方後円墳を霞ヶ浦北西岸地域の古墳時代史に位置付けるため、この地域での2006年以来の石岡市舟塚山古墳・丸山4号墳・佐自塚古墳、行方市大日塚古墳（発掘調査も）、小美玉市地藏塚古墳の測量調査成果と、採集（大日塚古墳については発掘）した埴輪の分析結果をまとめ、さらに2001～04年度の科研の成果とも統合解釈し、この地域における在地豪族の動向をモデル化した。ポイントは次の通りである。

1. 5世紀第1四半期に東国第2位の規模を誇る舟塚山古墳が築造され、その時期、周辺では前方後円墳の築造が憚られる。これは、百舌鳥・古市古墳群で象徴される中央の王権との関係で、舟塚山古墳に埋葬された大首長を共立したことの反映と考えられる。
2. 5世紀第4四半期には、舟塚山古墳を頂点とした体制が崩れ、全長90m前後の前方後円墳が立花郷（沖洲古墳群）、田余郷（玉里古墳群）、茨城郷（舟塚山古墳群）、安餝郷（富士見塚古墳群）に各1基、相前後して築かれる。現状で玉里古墳群の一部と考えている、前方部が削平され遺物がなく年代的位置づけが難しい大井戸古墳もこの時期の5基目の大型前方後円墳の可能性が協力者の曾根俊雄に指摘されており、その場合は大井戸古墳とその周辺の円墳は玉里古墳群から独立させる必要がある。
3. 6世紀第2四半期には、玉里古墳群で大型前方後円墳の築造が集中する。これは近隣の複数の別系譜の豪族たちが墓域を共有した結果と考えられる。
4. 6世紀第3四半期以降、各地での前方後円墳・大型円墳の築造が再開される。

霞ケ浦沿岸の前方後円墳被葬者の性格を考える上で、ヒントとなるのは交通である。今回の研究では、文献史の川尻秋生と吉川真司の参加を仰いだおかげで、主要古墳が霞ヶ浦の津（港）付近に立地することが明らかになった。例えば、江戸時代の沖洲付近に三昧塚古墳、江戸時代の大井戸付近に大井戸古墳、江戸時代の高浜付近に府中愛宕山古墳、江戸時代の柏崎付近に富士見塚古墳が存在する。このことは、古墳時代には既に津が存在しており、霞ヶ浦の通行を管轄することで大型古墳の築造ができるだけの富、あるいは力を蓄積させることができたと考えられる。

これらの成果を常陸の古墳時代史に位置付けるため、常陸大宮市、日立市、東海村、大洗町、桜川市、茨城町、行方市、美浦村、稲敷市、牛久市、鹿嶋市、潮来市の古墳・古墳群集成を『続常陸の古墳群』として刊行した（『常陸の古墳群』は2010年に刊行）。横穴墓などどの属性に注目するかにもよるが、当初の予想に反して、古墳文化の地域性が常陸の旧国造の領域とは必ずしも一致しないことが明らかになってきた。古墳時代後期に大型前方後円墳の築造が継続する以外に、古墳時代中期に大型円墳の築造が続くのも、常陸の古墳文化の大きな特色であることもわかってきた。

播磨では、兵庫県市川上流域の主要な横穴式石室の基礎資料をほぼ完成させることができた。つまり、地域の後期古墳を悉皆的に検討したことから、播磨国神前群（神埼郡）の様相の解明に大きく近づいたのである。特に横穴式石室の形態の分析に基づけば、播磨の南北両地域との関係が想定できるのであるが、それは『播磨国風土記』が記録する土師氏の南北の地域との政治的つながりに関する伝承を考古学的に追認したことになる。

今回のプロジェクトでは、常陸については播磨ほど当初の大目的であった文献史との融合が十分できなかった。それでも、常陸南部における交通の重要性を古墳からアプローチすることに成功し、大きな成果をあげたと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 佐々木憲一	４．巻 6-2
２．論文標題 Adoption of the Practice of Horse-Riding in Kofun Period Japan: With Special Reference to the Case of the Central Highlands of Japan.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Japanese Journal of Archaeology	６．最初と最後の頁 23-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中裕	４．巻 22
２．論文標題 古墳時代地域結合体の動態と『常陸国風土記』建評記事	５．発行年 2019年
３．雑誌名 島根県古代文化センター研究論集	６．最初と最後の頁 277-290
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中裕	４．巻 1
２．論文標題 千葉県域の前期古墳と集落・土器群の動向	５．発行年 2018年
３．雑誌名 早稲田大学東アジア都城･シルクロード考古学研究所研究論集	６．最初と最後の頁 145-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々木憲一	４．巻 82
２．論文標題 茨城県行方市大日塚古墳発掘調査報告	５．発行年 2018年
３．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	６．最初と最後の頁 31-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 TANAKA Yutaka	4．巻 5/1
2．論文標題 Progress in Land Transportation System as a Factor of the State Formation in Japan	5．発行年 2017年
3．雑誌名 JAPANESE JOURNAL OF ARCHAEOLOGY	6．最初と最後の頁 26-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 菱田哲郎（京都府立大学文学部考古学研究室）	4．巻 4
2．論文標題 兵庫県神崎郡市川町山王1号墳測量調査報告	5．発行年 2018年
3．雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6．最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川真司	4．巻 126/5
2．論文標題 回顧と展望　日本古代4	5．発行年 2017年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 48-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々木憲一（筆頭）・小野寺洋介・佐藤リディア・九重明大・尾﨑裕妃	4．巻 10
2．論文標題 小美玉市地蔵塚古墳測量調査報告	5．発行年 2016年
3．雑誌名 小美玉市史料館報	6．最初と最後の頁 115-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菱田哲郎（筆頭）・井上直樹・向井佑介ほか8名	4．巻 3
2．論文標題 兵庫県神河町所在古墳群の測量調査	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	6．最初と最後の頁 53-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川尻秋生	4．巻 3
2．論文標題 舟を操る技術	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日本古代の交通・交流・情報	6．最初と最後の頁 300-321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川眞司	4．巻 75
2．論文標題 難波宮と大化改新	5．発行年 2016年
3．雑誌名 明日への文化財	6．最初と最後の頁 3-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々木憲一	4．巻 86
2．論文標題 古墳時代考古学の国際化	5．発行年 2020年
3．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	6．最初と最後の頁 197-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐々木憲一	４．巻 1
２．論文標題 古墳時代信濃の首長	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ナベの会考古学論集「和の考古学」	６．最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々木憲一	４．巻 73
２．論文標題 古墳時代の文字	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中央大学人文科学研究所研究叢書「考古学と歴史学」	６．最初と最後の頁 165-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菱田哲郎・京都府立大学文学部考古学研究室	４．巻 6
２．論文標題 京田辺シオ1号墳の調査	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	６．最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菱田哲郎・京都府立大学文学部考古学研究室	４．巻 6
２．論文標題 和東町和東天満宮周辺における考古学的調査	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報	６．最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々木憲一	4．巻 III
2．論文標題 長野市大室古墳群における階層構造	5．発行年 2018年
3．雑誌名 待兼山考古学論集	6．最初と最後の頁 497-516
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　5件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 佐々木憲一・忽那敬三
2．発表標題 常陸の古墳文化理解のための新研究
3．学会等名 日本考古学協会　第84回総会
4．発表年 2018年

1．発表者名 田中裕
2．発表標題 水上交通志向の社会と磯浜古墳群
3．学会等名 大洗町第2回埋蔵文化財企画展講演会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 田中裕
2．発表標題 鹿島の古代史
3．学会等名 鹿嶋市文化財愛護協会50周年記念講演会（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 田中裕
２．発表標題 石岡市舟塚山古墳からみた５世紀の大変革
３．学会等名 第４回石岡市文化財調査報告会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 日高慎
２．発表標題 東国の埴輪群像
３．学会等名 今城塚古代歴史館「ハニワの日」記念講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 日高慎
２．発表標題 埼玉古墳群とその周辺の埴輪－生産と流通－
３．学会等名 平成30年度さきたま講座第6回　企画展関連講座①（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐々木憲一
２．発表標題 Distributing the “Standard” of Mound Construction to Local Elites as an Example of Inalienable Wealth
３．学会等名 第2回European Association for East Asian Art and Archaeology（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐々木憲一
２．発表標題 Center and Periphery in the Early State Formation in Japan
３．学会等名 Roundtable Discussion: Archaeology and the Early Japanese State, プリンストン大学考古美術史学科・東アジア学科共催（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 菱田哲郎
２．発表標題 State formation and the introduction of Buddhism to Japan: Archaeological Persppective
３．学会等名 Roundtable Discussion: Archaeology and the Early Japanese State, プリンストン大学考古美術史学科・東アジア学科共催（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉川真司
２．発表標題 国風文化研究の展望
３．学会等名 プリンストン大学EAS国際会議（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐々木憲一
２．発表標題 Adoption of a Pracice of Horse-Riding in Fifth-Century Japan
３．学会等名 Society for East Asian Archaeology、７ｔｈ Meeting（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 佐々木憲一
２．発表標題 Regional Differences in Elite Symobolim during Kofun Period Japan
３．学会等名 8th World Archaeological Congress（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 川尻秋生
２．発表標題 古代東国の在地社会と仏教
３．学会等名 民衆史研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 吉川眞司
２．発表標題 大和高原の杣と古代山林寺院
３．学会等名 古代寺院史研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 吉川眞司
２．発表標題 忍頂寺と北摂山林寺院
３．学会等名 古代寺院史研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐々木憲一・田中裕・日高慎
２．発表標題 常陸における前方後円墳築造の終焉
３．学会等名 日本考古学協会　第85回総会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計18件

１．著者名 福永伸哉・Thomas Knopf・佐々木憲一	４．発行年 2018年
２．出版社 Archaeopress	５．総ページ数 225
３．書名 Burial Mounds in Europe and Japan	

１．著者名 Mark Byington, 佐々木憲一, Martin Bale	４．発行年 2018年
２．出版社 Korea Institute, Harvard University	５．総ページ数 433
３．書名 Early Korea-Japan Interactions	

１．著者名 広瀬和雄・山中章・吉川真司	４．発行年 2018年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 372
３．書名 講座畿内の古代学 古墳時代の畿内	

１．著者名 菱田哲郎・吉川真司	４．発行年 2019年
２．出版社 京都府立大学文学部考古学研究室	５．総ページ数 50
３．書名 竜王山・忍頂寺の調査I	

１．著者名 日高慎ほか	４．発行年 2018年
２．出版社 かみつけの里博物館	５．総ページ数 96
３．書名 太子塚古墳を考える	

１．著者名 日高慎ほか	４．発行年 2018年
２．出版社 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社	５．総ページ数 72
３．書名 古墳時代の終わりを探る	

１．著者名 佐々木憲一　ほか	４．発行年 2018年
２．出版社 明治大学文学部考古学研究室・六一書房	５．総ページ数 267
３．書名 霞ケ浦の前方後円墳	

１．著者名 Karl Friday，佐々木憲一ほか	４．発行年 2017年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 418
３．書名 Routledge Handbook of Premodern Japanese History	

１．著者名 安斎正人、佐々木憲一ほか	４．発行年 2017年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 495
３．書名 理論考古学の実践：理論編	

１．著者名 田中裕･大里美穂・一之瀬敬一・栗原悠・稲田健一	４．発行年 2018年
２．出版社 茨城大学人文社会科学部考古学研究室	５．総ページ数 150
３．書名 茨城県中央部の古墳調査―測量報告（墳丘･石室･遺物）	

１．著者名 吉川真司	４．発行年 2018年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 368
３．書名 天皇の歴史02 聖武天皇と仏都平城京（文庫版）	

１．著者名 川尻秋生	４．発行年 2017年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 266
３．書名 坂東の成立―飛鳥・奈良時代	

１．著者名 菱田哲郎、吉川真司	４．発行年 2019年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 512
３．書名 古代寺院史の研究	

１．著者名 白石太一郎先生傘寿記念論文集編集委員会、田中裕	４．発行年 2019年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 484（田中執筆202-7）
３．書名 古墳と国家形成期の諸問題	

１．著者名 常木晃先生退職記念論文集編集委員会、田中裕	４．発行年 2020年
２．出版社 六一書房	５．総ページ数 578（田中執筆359-69）
３．書名 世界と日本の考古学　オリーブの林と赤い大地	

１．著者名 国立歴史民俗博物館、松木　武彦、福永　伸哉、佐々木　憲一	４．発行年 2020年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 280
３．書名 日本の古墳はなぜ巨大なのか	

１．著者名 蓼沼香未由・広瀬和雄・田中裕	４．発行年 2019年
２．出版社 茨城県大洗町教育委員会	５．総ページ数 218
３．書名 磯浜古墳群Ⅰ姫塚古墳・車塚古墳・日下ケ塚（常陸鏡塚）古墳―平成２１～２４年度範囲確認調査成果総括報告書調査報告書―	

１．著者名 若狭　徹	４．発行年 2016年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 304
３．書名 前方後円墳と東国社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菱田　哲郎 (Hishida Tetsuo) (20183577)	京都府立大学・文学部・教授 (24302)	
研究分担者	田中　裕 (Tanaka Yutaka) (00451667)	茨城大学・人文社会科学部・教授 (12101)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉川　真司 (Yoshikawa Shinji) (00212308)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	若狭　徹 (Wakasa Toru) (50751848)	明治大学・文学部・専任准教授 (32682)	
研究分担者	川尻　秋生 (Kawajiri Akio) (70250173)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	日高　慎 (Hidaka Shin) (70392545)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	